



Title	長谷川雄太郎研究・その2 : 日本語史的観点から
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 21, 14-33
Issue Date	2017-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70442
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU21_02_nakamura.pdf



長谷川雄太郎研究・その2

－日本語史的観点から－

中 村 重 穂

長谷川雄太郎研究・その2

－日本語史的観点から－

中 村 重 穂

要 旨

小論は、明治期・清末の日本語教師・長谷川雄太郎の教科書『日語入門』を近世～近代日本語史の観点から分析・考察し、その特徴と教科書設計意図を明らかにすることを目的としたものである。幕末～明治期までに大きな変化のあった11の表現の『日語入門』に於ける出現状況を分析した結果、長谷川が日本語の変化に意を払いつつも実際の使用場面での汎用性を重視したことを明らかにした。同時に、「視点」という発想の欠如により移動動詞・授受表現・受身の配列や説明に問題のある点を含むことも指摘した。また、アスペクトに対する長谷川の重点的な説明の理由をなお残る疑問として提示し、さらなる研究の必要性を述べた。

〔キーワード〕 長谷川雄太郎、『日語入門』、近代日本語

1. 問題の所在

明治時代の日本語教師（清国広州同文館日本人教習）・長谷川雄太郎（1865(慶応元)～1904(明治37)年）の手になる日本語教科書『日語入門』（初版1901(明治34)年）に関しては、幾つかの研究（さねとう（1960）、吉岡（2000）、吉岡（2002）、劉（2005）、谷口（2011）、中村（2015）、魏（2016）、続（2016）、中村（2016））が著されてきた。これらは、様々な角度から『日語入門』を考察しているが、文法項目に言及する場合に共通する問題として、現代的な（文法／構造シラバスの）視点に立っており、当時の日本語の実相を必ずしも踏まえていないという点を指摘し得る。

長谷川が『日語入門』を執筆していた明治30年代は、江戸時代・幕末期～明治維新を経て様々に変化してきた日本語が漸く安定し始める時期であった。つまり、『日語入門』は、教科書として一定の規範を保持しようとしながらも当時の日本語の揺れ動く部分も含んでいたと考えられる。そして、その中で長谷川がどのような表現を教材化したかを日本語史的に分析

することで、その時代的特性と、学習者¹⁾に対する配慮の有無を考察できると考えられる。このような試みの先駆として伊藤（2017）がある。小論は、この伊藤の業績に学びつつ『日語入門』を日本語史的に分析・考察し、その特徴を明らかにすることを目的とするものである。

以下、小論では『日語入門』各課から引用する場合、課番号の漢字表記をアラビア数字で表し、また、旧漢字旧仮名遣いについては、漢字のみ新漢字で表記することとする。

2. 先行研究概観

『日語入門』に関する先行研究については中村（2015）が触れているので、小論ではその後新たに確認された研究のみ取り上げる。

中村（2016）でも言及されているが、魏（2016：40）は清朝末期の日本語教科書を音声教育面から分析する際に『日語入門』をも考察の対象とし：

- (i) 「音声と文字を組み合わせる方法を採用して、学習者の日本語の発音能力を育成しようとしている」
- (ii) 「発音混同問題を解決する方法として、長谷川は全ての仮名文字に一文字の漢字で音を付している」
- (iii) 「『転呼音』の入れ替えの問題については、長谷川は音変化を伴う仮名文字の隣に対応する表記を付け加えることによって注意を促している」

という3点をその特徴として析出している。

続（2016：133）も、清末日本語教科書の音声教育を考察し、6種類の教科書を分析する中で『日語入門』も取り上げているが、仮名に付された中国語漢字による発音について：

「説明がないので、ここの漢字はどこの方言で示されているのか、不明である。しかし、上述の教科書〔『東語入門』及び『東語正規』－引用者註〕と違うところが明白である。…（中略）…本書は「入門」と称されているので、日本語の単語と連語や短い文を挙げているのみで、発音に関しても説明がなく、発音の研究にはさほど価値がないものかもしれない。」

と低い評価を与えているのみである。²⁾

以上が先行研究の概観である。

3. 分析の方法

分析の方法としては、先に述べた伊藤（2017）に範を取り、幕末から明治（一部大正）時代にかけて何らかの変化や時代的な特色が現れた表現を取り上げ、それらの『日語入門』での取り扱いを抽出・検討することにする。小論では田中（2001）、田中（2002）、田中（2007）を参考にして対象とする表現を後掲の11表現とし、『日語入門』に於ける記述を抽出した。

その際、中村（2015）が掲載しているとおり『日語入門』には、草稿、初版（2冊）、再版、四版、六版の現存が確認されているが、これらの間で本文の変更はない³⁾ ことから現在の最終版である六版（1907(明治40)年・富山大学附属図書館梶井文庫蔵本）を底本として用いることにする。

田中の諸著作を参考とした理由は、幕末～明治期にかけての日本語の変化、特に文法と近代語史について、通史的ではなく、語法・表現（＝日本語教育の観点から言えば文型に相当するもの）・文体ごとにその変化を記述・考察する方針を採っているため、近代語の成立過程で変化の著しかった項目の抽出が容易に行えるものであることによる。

なお、『日語入門』全90課中小論が対象とするのは、文が導入される第13課以降である。

4. 分析

本章では、各表現について『日語入門』の記述を抽出し、その特徴を検討する。

①「ウ・ヨウ(ヤウ)」による推量表現

現代の東京語では、「ダロウ」が推量表現で、「ウ・ヨウ」は意志・勧誘の用法を有するが、田中（2001：29）によれば、「東京語でも、この区別が確立したのは、比較的新しく、明治の中ごろまでは『ウ・ヨウ』による推量の言い方も珍しくなかった」と説明されている。

『日語入門』では、「ウ・ヤウ」は39課で出現するが、その扱いは「未来語」で、推量の働きは説明されていない（「現在語」は辞書形で、「過去語」はタ形）。各課冒頭で提示される動詞は、39課3語、41課・43課・46課・48課・50課・52課・54課各4語の合計31語で、これらの動詞が本文でも用いられている。提示される文体は全てデアル体である（例：着ヤウ、オキヤウ）が、本文では全てデス・マス体、つまり「助動詞マス未然形+ウ＝マセウ」（例：「私モ着物ヲ着マセウ」、「明日ハ早く起キマセウ」）になっている

る。長谷川はこれについてデアル体を「常言」、デス・マス体を「敬辞」として区別している。

田中（2002：363-364）によると、江戸語では「『～マシヨウ（～ヤシヨウ）』の形で、『推量』も『意志・勧誘』も表すのが普通」で、「一九〇四年（明治三七）から使用された最初の国定教科書『尋常小学読本』には、丁寧体の推量表現として…（中略）…『～マシヨウ』と『～デシヨウ』の両方が出てくる」が、その後の変化の中で「『～マシヨウ』の方は推量の言い方としては次第に用いられなくなり、『～マシヨウ』は『意志・勧誘』の専用形に移行していく」。

『日語入門』の時代にはまだこれらが未分化のままで、明治時代中期の日本語を反映しているといえることができる。そして、推量は未来の事象に（も）関わる判断という面を持つものであるため、その時間的意味が抽出され、両者が「未来語」としてまとめられたことが推察される。

②打ち消し推量・意志「マイ」

『日語入門』に於ける「マイ」の扱いには少々混乱が見られる。初出は66課で、「此ノ町ニハ車ハアリマスカ」「アリマスマイ」という疑問と応答の中で提出される。この課の指導項目は否定表現（「ナイ」等）であるが、この箇所だけに「マイ」が現れており唐突な感じは否めない。

また、上の「マイ」には上部欄外に「マイ、思量之語也」と説明が書かれているが、これでは「マイ」の打ち消しの意味が含まれず、説明として適切であるとはいいがたい。この「アリマスマイ」には「怕没有」という中国語訳が付いているので、長谷川は説明を書く際にこの「怕（＝恐れる、心配である）」の意味（だけ）に引きずられた可能性も考えられる。

「マイ」が指導項目として出現するのは68課で、「過去格否定語」＝「ナカッタ／マセヌデシタ」に続いて「未来格思量語」として提示される。この構成から66課は—そのようには書かれていないが—謂わば“現在格否定語”という位置づけになっており、67課で（応用）練習を行い、それを踏まえて68課で過去と未来が扱われていると判断できる。

ただ、ここでの「マイ」の提出の仕方には意味と形の両面で注意すべきことがある。長谷川が挙げている本文を順に記すと、「雨ハ降りマスマイ」、「此ノ石ハ重クハアリマスマイ」、「アレハ^{クラジ}火事デハアリマスマイ」、「明日^{ヤスミ}ハ休デハアリマスマイ」、「此ノ駕籠ハ軽クアリマスマイ」、「梅ハマダタベラレマスマイ」、「アノ家ニハ人が住ンデハ居マスマイ」、「アノ山ニハ蛇ハ

居マスマイ」となっている。

これらを見ると、意味の面では66課と同じく「思量」＝推量の意味しかない。また、形の面では助動詞「マス」＋「マイ」だけで五段活用動詞終止形＋マイ、その他の動詞・助動詞未然形＋マイの形は全くない。

田中（2001：29）は、「打ち消しの場合は、明治の中ごろまでは、推量も意志も、助動詞『マイ』で表現されるのが普通だった」と述べているが、『日語入門』では意志を表す本文は採用されていない。

これらについては、長谷川が「マイ」を推量に限定することで学習者の負担を軽減しようとしたと解釈できるが、打ち消しの意味を十分に提示していないのは、学習者に対する配慮を欠くものと判断される。

③「～ニ」と「～ヘ」（＋移動動詞）

田中（2002：432-433）は、『村ニ行く／村ニ来る』の類は、明治の中ごろからふえてきた言い方」と述べ、また、田中（2001：32）では、鶴岡（1979）の調査結果を参照して「明治三十年代の作品あたりから『～ニ行く』も現れ始めるが、全体として『ヘ』の優位は動かない」と述べている。

『日語入門』の「～ニ」と「～ヘ」の出現状況を見ると、15課で「山ニ登ル」、「家ニ帰ル」がまず現れる。20課で動詞「往^ユク」が、23課で補助動詞「持ッテ往ク」、26課で「走ル」が出てくるが場所格を伴わず、この後、「行（往／往）ク」は48課まで現れない。「来ル」の方は23課が初出であるが、補助動詞「車ヲ挽イテ来ル」の形で現れ、本動詞としては41課で出てくるが、場所格としては「～カラ」を伴い、「～ニ」と「～ヘ」は使われていない。「行ク」、「来ル」及びそれらの敬体等が場所格を伴って現れるのは49課以降である。表1に49課以降の「～ニ」と「～ヘ」の出現状況を示す。

表1：「～ニ」と「～ヘ」の出現状況

動 詞	ニ	ヘ
行(往／往)ク	13	17
来ル	2	0
御出ナサル	0	3
イラッシャル	0	2
参ル	2	2
登ル	1	0
帰ル	1	0
総 計	19	24

これを見ると、「～へ」の優位が認められる一方、興味深い点として「～へ」が尊敬表現に於いて優位に出現している。長谷川は、57課で「～へ」と「～ニ」の違いについて、本文で「何処^ニ往キマスカ」と「何処^ヘ御出ナサイマスカ」を提示した上で、上部欄外に「ニ^ニへ通用、而へ専有向字之意」(＝「ニ」と「へ」は共通して用いられるが、「へ」は専ら「～の方に向かって」の意味を有する)と中国語で説明を加えているのに対し、「ニ」については特に説明していない。また、二つの本文の違いについて、後者は「前句の敬辞」、つまり敬体表現であると説明している。

以上のことから、長谷川は、「～へ」の持つ方向性の意味を指導上の注意事項として自覚していたと共に、(根拠は明らかではないが)それが尊敬表現に於いて現れやすいものであると考えていたと推定される。

ただ、後者については、「～へ」の特徴的意味としての説明がないので、尊敬表現が後続しない文を見た学習者が戸惑う可能性もあったと思われる。同時に、明治時代後期からの、「～へ」の優勢な環境の中で「～ニ」が徐々に使用されるようになっていた状況を表してもおり、この点で学習者にその当時の最新の日本語が提供されていると考えることができる。

④理由の接続助詞「ノデ」と「カラ」

『日語入門』に於いて「ノデ」は1例のみ、「カラ」は15例現れるが、特に「カラ」の現れ方には特徴がある。「カラ」の初出は41課「熱^ニイカラ窓^ヲアケマセウ」で、上部欄外に「カラ、因為也」と訳語を付している。これ以後「カラ」は、46課、54課、65課、74課⁴⁾、75課、88課に現れるが、特に74課で「ホシイ、タイ、タク、タシ」という欲求・願望の表現を教える際に、「靴下ガ破レタカラ買フテ貰ヒタイ」、「着物ガヨゴレタカラ洗^{アラ}ッテ貰ヒタイ」、「梨子ヲ食ヒタイカラ買フテ下サイ」、「冬帽子ヲ買ヒタイカラ金ヲ下サイ」、「日本語ヲ覚エタイカラ教ヘテ下サイ」という形の、「～カラ～タイ」、「～タイカラ～テ下サイ」という構造で提示されるものが1/3を占めている。

また、現代に於ける「ノデ」の「断りの理由や言い訳を述べるのによく使われる」〔グループ・ジャマシイ(1998:470)〕用法という観点から見ると、多くの場合「ノデ」を使うように指導されるであろう下のような本文(75課)にも「カラ」が用いられている。

「アナタハ昨日何故欠^{セキ}席シマシタカ」

「頭ガ痛ミマシタカラ休ミマシタ」

これに対し、僅か1例しか見られない「ノデ」は、82課の「書物一部ト云フハ ^{ハジメ}初 ^{オハリ}カラ 終マデヲ合セテ云フノデ、二冊一部ノガアリ五冊一部ノガアリマス」という本文で現れるが、上部欄外に意味説明や訳語はない。

このような「ノデ」と「カラ」の関係、特に「カラ」の優位について歴史的に見てみると、田中（2007：266-267）は：

「江戸ことばの時代にさかのぼると、十八世紀中葉の江戸では…（中略）…上方風の『～サカイ』や『～ニヨッテ』などが幅をきかせていた。その後、次第に『～カラ』が優勢になってきて、『～サカイ』や『～ニヨッテ』などの『上方語系』の言い方は急に衰えてくる」

と述べ、江戸時代から「カラ」の優位が始まっていると指摘している。

これに対し、「ノデ」について田中（2007：269-271）は、「上方語の『～デ／～ノデ』が、まず東海地方から中部地方に広がり、さらに東進して江戸語に入ってきた」結果、『～ノデ』の方は…（中略）…江戸語でも明治期の東京語でも、やや改まった、品のいいことばとして稀に用いられるものであった」と述べている。その後、さらに「～デ」が衰退し、「～ノデ」が明治の中ごろから盛んに用いられるようになって東京語に於ける「カラ」と「ノデ」の併用が実現することになった。

以上の論述は、『日語入門』に於ける「カラ」の優位に必ずしも合致しないように思われるが、これについてはもう一つ注意すべき点がある。空間的に捉えた場合、田中（2001：35）が述べるように「『カラ』は、ほぼ、関東から、東北地方南部に分布し、『ノデ・ンデ・デ』は、中部地方・関東南部にみられる」という現象が観察される。長谷川は現在の群馬県館林市、即ち「カラ」が優勢な北関東地域出身であることから、『日語入門』に於ける「カラ」の優位はかかる事情を背景としているとも考えられる。

このような点は、明治中期からの日本語の変化を考えた場合、学習者にとって少々不十分な面を含むと言えるが、長谷川は、伊藤（2017：13）が金井保三について述べたように「留学生が生活するうえでは、『カラ』のみで事足りると判断した」という解釈の余地もあると思われる。

⑤当為表現

『日語入門』の当為表現は、77課の「～ネバナラヌ」と86課の「～シナケレバナリマセヌ」2例のみである。77課では、「コレハアタノセネバナラヌコトデアリマス」という本文が提示され、上部欄外に「ネバナラヌ、不可不、不能不也」という訳語が書かれている。86課では、「男モ女モ学問

シナケレバナリマセヌ」という本文が提示され、上部欄外に「シナケレバナリマセヌ、不可不也」と訳語が付されている。

これらについて特徴的な点を挙げるならば、後部分が「ナル」系（＝～ナラヌ／～ナリマセヌ）で共通している一方、前部分は「ズ」系（＝～ネバ）と「ナイ」系（＝ナケレバ）に分かれていることである。

近世～近代の当為表現の歴史について、田中（2001：683）を参看すると；

「近世江戸語の資料において…（中略）…当為の表現の様相を調べてみると、まず後部分について言えば、『ナル系』が圧倒的で、『イク系』は、まったくないと言ってよい。前部分については、前部分が、『ズ系』の表現は、咄本・洒落本・黄表紙・人情本・歌舞伎脚本など、江戸語資料のほぼ全域に見られるが、『ナイ系』のものは、主として滑稽本・人情本など時代的に、ややおそい時期の資料に多い。…（中略）…これは、打消の助動詞の『ズ→ナイ』の交替からみて、当然といえるが、江戸語のこの種の当為表現全体としてみれば、やはり、前部分の『ズ系』の表現が、支配的である」

と述べられており、さらに、「前部分が『ズ系』の表現のなかで、江戸語資料に、もつとも頻繁に現れるのは『ネバナラヌ（ネバナラン・ネバナラズ）』の形である」と記されている。

ここから見ると近世の当為表現は「～ネバナラヌ」、「～ネバナラナイ」が優位を保っていたということが出来るが、同時に田中（2001：40）は、「『～ナケレバナラナイ』の方は、江戸語以来、現代に至るまで、正統派ともいべきもので…（中略）…その優位はゆるがなかった」とも述べているので、上記二つに加えて「～ナケレバナラナイ」もまた一定の定着度を有していたということができる。

このような当為表現の移りゆきを見ていくと、長谷川は、その中でも特に優勢だった「ズ系・ナイ系+ナル系」という構造を選択し、必要最低限で汎用性の高い日本語を提供しようとしたと考えられよう。

⑥尊敬表現「イラッシャル」

『日語入門』では「イラッシャル」は本動詞として57課に4例、補助動詞として58課に4例現れている。57課では；

「何処ヘイラッシヤリマスカ」	「学校ヘ往キマス」
「何処ニ居ラッシヤリマスカ」	「親類ノ家ニトマッテ居リマス」
「何処ヘイラッシヤイマシタカ」	「香港ヘ往キマシタ」

「何処ニ居ラッシヤリマシタカ」^[ママ]

「奥^{オク}ノ部屋デ書物ヲ調^{シラ}ベテ居マシタ」

という疑問詞疑問文と回答で提示されている。58課では；

「何処ヘ往ッテイラッシヤイマスカ」^[ママ]

「白雲山ニ墓^{ハカマホリ}参ニ往ッテ来マス」⁵⁾

「何処ニ往ッテ居ラッシヤイマスカ」^[ママ]

「今日本ノ横浜ニ往ッテ居リマス」

「何処ヘ往ッテイラッシヤリマシタカ」^[ママ]

「澳門マデ往ッテ来マシタ」

「何処ニ往ッテ居ラッシヤイマシタカ」^[ママ]

「用事ガアッテ香港ニ往ッテ居リマシタ」

という形で同じく疑問詞疑問文と回答で提示されている。

ここで容易に気付かれるのは、イ音便が安定せず「イラッシャイマス」と「イラッシャリマス」が混在していることである。また、カタカナの本動詞「イラッシャル」で移動（＝行く）の意味を、漢字の本動詞「居ラッシャル」で存在（＝イル）の意味を表し分けていることが分かる。しかし、片仮名の補助動詞「～テイラッシャル」については、「何処ヘ往ッテイラッシャリマシタカ」は、漢字の補助動詞「～テ居ラッシャル」と並んで「ある場所に行ってそこにい（続け）る」という状態継続の意味を表すものであることが見て取れるが、「何処ヘ往ッテイラッシャイマスカ」は、応答の「白雲山ニ墓参ニ往ッテ来マス」との関係を見る限り、状態継続というよりも敬意を添加する機能に限定されていると判断される。

歴史的にこの表現を見ると、田中（2001：548）は；

「敬語動詞の『イラッシャル』や補助動詞の『～テイラッシャル』『～デイラッシャル』の形は、明治期には、まだあまり用いられていなかった。これらは、いずれも幕末期から使われはじめたもので、広く用いられるようになるのは、明治の後半期から大正のころである」

と述べている。ただ、これについては少々解釈に幅があるようで、田中は、田中（2002：306）では「『待つてイラッシャル』『元気でイラッシャル』のような『イラッシャル』の補助動詞としての用法が、盛んになるのも、この時期〔明治10年代—引用者註—〕である」と記している。

以上から、長谷川は、明治期の新しい敬語表現「（～テ）イラッシャル」を積極的に取り入れて学習者の便を図ったが、形や意味が確定し切れてい

ない当時の使用状況がそのまま反映されているともいうことができる。

⑦尊敬表現「オ（ゴ）～ニナル」

現代の日本語教科書に見られる尊敬表現「オ～ニナル」は、日本語史上は幕末（天保期）の江戸語に見られ、それが明治期に一般化していくが、その時期については少々揺れが見られる。

田中（2001：548）は「この言い方が一般化するのは、やはり、明治の終わりごろからである」と述べているが、他方、田中（2002：360）は「幕末期に成立し、明治の中ごろから一般化して標準語に引き継がれたものである」、田中（2007：202）では「明治の中頃から東京のことばで一般化したものという」として一般化の時期を明治中期と述べている。

これは、換言すれば「オ～ニナル」は明治期にはまだ江戸語以来の他の尊敬表現と拮抗する状況にあったということであり、それを反映するかのよう『日語入門』では、「オ～ニナル」は一切使われていない。

『日語入門』で尊敬表現として用いられているのは「オ（御）～ナサル」の形である。これは、田中（2001：571）によれば、『ナサル』は、『オ～ナサル』『ゴ～ナサル』とともに、前期の上方語にも見られるが、江戸語においては、きわめて頻繁に用いられ、江戸語の一つの代表的な敬語表現形式であり、22箇所に見れている。これらは、本動詞としての用例であるが、その他に補助動詞「～テイル」の尊敬語としての「～テオイデナサル」が疑問形で5箇所、丁寧な命令形としての「オ～ナサイ」が16箇所、禁止命令形としての「オ～ナサルナ」が4箇所出現している。

『日語入門』での「オ（御）～ナサル」の採用は、尊敬表現の選択に於いて敢えて流動的な表現を採用せず伝統的な表現に絞り、複雑な敬語体系を集約化することで学習者の学びやすさに配慮したものと思量される。

⑧尊敬表現「オ～ダ」と「オ～デス」

幕末から明治にかけての特徴的な敬語表現の変化としてもう一つ「オ～ダ」の衰退と「オ～デス」の形成が挙げられる。田中（2001：551）は；

「明治期までは、さかんに使われてたのに、大正期以降、あまり用いられなくなったものに、『オ～ダ』の形がある。…（中略）…この『オ～ダ』の形の衰退と入れかわりに、使われるようになったのが、『オ～デス』の形である。この形は明治の初めに生まれたもので、…（中略）…この形は、『先生ガオ待チデス』のように、現在も、よく使われるが、一般化したのは、明治の終わりから大正期のころである」

と述べている。

『日語入門』では、「オ〜ダ」は全く見られず、「オ〜デス」が6例認められる。ただ、それらは、「アナタハ字が大層御上手デス」(77課)、「アナタノ御考次第デス」(77課)、「アナタノ御歳ハ御イクツデスカ」(79課)、「誠ニ御匆匆テシタ」(87課)、「結構ナ御天気デハアリマセスカ」(88課)、「御互様デス」(89課)であり、田中が指摘する「オ+動詞連用形+デス」ではなく、イ形容詞、疑問詞、名詞を挟む形である。

長谷川が「オ〜ダ」、「オ+動詞連用形+デス」の形を使用しなかったのは、田中が説明するような時代的な背景に加えておそらく⑦で述べたように、尊敬表現を極力「オ(ゴ)〜ナサル」に限定することで学習者の負担を軽減しようとしたことも理由として挙げられよう。

⑨可能表現

『日語入門』に於ける可能表現は、「デキル」、「〜コトガデキル」が67課で初出であり、この型の表現が67課で2例、77課で4例現れる。可能動詞・助動詞型は、68課、75課、80課で各1例計3例出現する。

まず可能動詞・助動詞の変遷を見てみると、田中(2002:365)では：

「現在の標準語法では、『〜レル・〜ラレル』は、ほぼ『受身』の表現の専用形として用いられ、『可能』は可能動詞や『〜コトガデキル』の形で表されるのが普通である。また、『尊敬』の表現も『〜レル・〜ラレル』よりは、尊敬動詞や『オ〜ニナル』などの形で表現されることが多い。しかし、江戸語では…(中略)…『〜レル・ラレル』による『可能』や『尊敬』の表現が普通に用いられていた。このうち『〜レル・ラレル』による『尊敬』の表現は、すでに江戸語ではかなり早くから衰退期に入っており、『可能』の方も江戸語では可能動詞が好んで用いられたうえ、十九世紀初頭の文化文政期には『〜コトガデキル』の形が成立し、次第に可能専用形に移行していった」

と説明されている。江戸期の可能表現としては、この他に「〜コトガナル」も存在したが、『〜コトガナル』の言い方は、やがて衰退に向かい、幕末から明治初期の東京のことばでは『〜コトガデキル』だけが生き延びてきた」〔田中(2007:239)〕とされる。

可能動詞・助動詞型の本文は、「梅ハマダタベラレマスマイ」(68課)、「アレハ足ガ早イカラドウシテ追付レマセウ」(75課)、「象牙ノパイプハ何程デ買ヘマスカ」(80課)の三つであるが、80課「買フ」については可能動

詞「買ヘル」を用いながら、75課「追付ク」については助動詞「～レル」を用いた「追付レル」という形を用いて可能動詞「追付ケル」を用いておらず、五段活用動詞の可能表現の扱いが統一されていない。

また、中国語訳について見ると、それぞれ上欄外に、「タベル、食也、タベラレル、可以吃也」、「追付レル、趕得上也」、「カヘル、可以買也」とあり、周囲の状況から条件がそろっていて（許されて）可能である場合（＝可以）、支障なく達成できる場合（＝得上）として説明している。

これに対し、「～デキル」、「～コトガデキル」は、67課では；

「私ニハ出来マセヌ」－「我不会做」

「アナタハ馬ニ乗リマセヌカ」－「爾不騎馬麼」

「私ニハ乗ルコトガ出来マセヌ」－「我不会」

という本文と中国語訳が、77課では；

「構ハスト云フコトハ出来マセヌ」－「不能不管的」

「ドウシテ出来マセヌカ」－「怎麼不能呢」

「私ニハドウシテモ出来マセヌ」－「怎麼樣我都做不成了」

という本文と中国語訳が現れている。

これらの可能表現の扱いは、可能動詞・助動詞型の本文が江戸期の表現の名残を示すもので、近世以降の新しい「～コトガデキル」型の表現と混在した状態であると考えることができる。同時に、学習者に、可能動詞・助動詞型の可能表現は「可以（及び得上）」＝状況可能で、「コトガデキル」型の可能表現は「会」＝習得の結果の可能、及び「能」＝能力や環境による可能であるという誤解を与える危険性のある翻訳になっていることが注目される。さらに、「会」と「能」に対応する「～コトガデキル」の区別も、口頭での説明なしにはこれらの例文では分明ではない。

この点は、長谷川の中国語理解の問題から生じたものとも考えられるが、初習段階で敢えて中国語と対応する日本語を分けて覚えやすくしようとしたと解釈できる一方、その試みは充分成功しているとは言い難い。

⑩「デアリマス」・「デス」・「デアル」・「ダ」

明治期は新たな文体の確立の試みが様々に行われた時代であった。その、特に教科書に関わる大きな流れを田中（2007：100-101）は；

「一八七二(明5)年の学制発布とともに、編集・刊行が進められた、小学校の教科書も、理数科や修身・地歴関係の文章は文語体だが、国語の読本ではさまざまな形の口語文体を試みて苦労を重ねている。明

治初期から十年代までは、主として『～デゴザリマス・～デゴザイマス・～デアリマス』が用いられ、会話教材などには、まれに『～デス』も顔をだしている。興味深いのは『会話（コトバヅカヒ）』の教科書に「～デアル」が試みられていることである。こうした揺籃の時期を経て、一八八七（明20）年に『～デアリマス』と『～デゴザイマス』を主体とする、文部省著作の国語教科書『尋常小学読本』が刊行される。小学校国語教科書の文体が、現在のように『～デス・マス』中心になるのは、一九〇四（明37）年から使われた、最初の国定教科書『尋常小学読本』からである」（原文の段落は省略）

と説明している。

『日語入門』では、27課で「デアリマス」、「デス」、「デアル」、「ダ」が提示されている（提示順）。これらは「末尾語」としてまとめられ、「也字之意」と説明されている。「デアリマス」は敬辞、「デス」は「デアリマス」の略言、「デアル」は常言、「ダ」は略言という関係となっている。これらに「～デゴザイマス」を合わせた「末尾語」（とそのヴァリエーション）の出現数を表2に示す。但し、各課冒頭の導入提示語は含まない。

表2：「末尾語」の出現数

表 現	出現数	表 現	出現数
デアリマス(カ)	107	デス(カ)	61
デアリマシタカ	2	デハアリマセヌ	1
デハアリマセヌカ	1	デシタ	1
デアリマセウ	1	デセウ	1
デアル	22	ダ	6
デゴザイマス	21		
デゴザイマシタ	1		
デゴザイマセウ	1		

これから分かることとしては、「～デアリマス」系の優位と「～デス」系の多用である。このうち「～デアリマス」については、上述の田中の説明に合致しているが、「～デス」は、『日語入門』初版が刊行された1901（明治34）年にはまだ国内の教科書で有力ではなかったので、興味深い現象と言える。これについて、田中（2002：397-398）は：

「『デス・デシタ・デショウ』といった活用のある『デス』は、幕末あ

たりから江戸の町人の、特に女性たちが、おもに使い始めたもので、当時としては、たしかに卑俗な感じのすることばだったに相違ない。さきに述べたように、漢学者や洋学者が編集した、明治初期の国語教科書に、まったく採用されていないのも、『デス』の、そうしたニュアンスによるものと考えられる」(原文の段落は省略)

と述べている。

長谷川はむしろ、庶民が使用することばを積極的に導入することで当時の“活きの良い”日本語を伝え、また、将来学習者が日本に留学することになった場合のことも考えて実際に使用されている言語を運用できるようにしようという教育的配慮を持っていたものと推察される。

⑪丁寧体推量の「～マセウ (マセウ)」

ここでは、①で「未来語」として扱われた31例以外に『日語入門』に現れる「～マセウ」に着目し、丁寧体推量の意味を有するものを析出してみたい。本文では問答の形になっているものが多いが、小論では紙幅の制約上「～マセウ」が含まれる部分のみを記すことにする。

前記31例以外の「～マセウ」は16箇所に見れるが、それらのうち丁寧体推量を表すと判断されるものは、「私ハ力ガ弱イカラドウシテアレニ敵ヒマセウ」(75課)、「アレハ足ガ早イカラドウシテ追付^{オヒツカ}レマセウ」(75課)、「二千噸内外デ御座リマセウ」(81課)、「アノ人ハドレ程力ガアリマセウ」(81課)、「葡萄^{ブサ}ハー房^{ツブ}ニ幾粒アリマセウカ」(84課)、「オシツマリマシテ御多忙^{タバウ}デゴ^{ママ}サ イマセウ」(89課)、「(御尊父様) 御死去^{ゴソンプ}ナサレマシテサゾ御愁傷^{シウシヤウ} デ御座イマセウ」(89課)の7例である。(その他は、意志を表すものが8例、勧誘を表すものが1例である。)

75課の2例はむしろ反語的表現として用いられているが、時間的には「未来語」と考えても不都合ではない。しかし、81課・89課の例は、明らかに話題の／眼前の事物・人物に対する推量を表している。

ここには「～マセウ」の機能が未分化だった時代の状況が反映されており、おそらくは長谷川の意図に反して丁寧体推量が含まれることになっているが、これらをも「未来語」と指導したとしたら、長谷川はどのような方法でいかなる説明を加えたのか推定することは困難である。

ただ、これは、学習者に対する配慮不足と批判されるよりも、当時の日本語文法研究の制約によるものと解釈するべきである。

5. 考察

本章では、前章の分析結果を整理したうえで、『日語入門』の教科書設計意図について考察してみることにしたい。

分析対象とした11項目の実態と教科書記述としてのあり方をまとめてみると概ね以下のように分けられる。

- (1) 当時の日本語の変化しつつある状況を何らかの形で反映し、取捨選択して学習者に配慮したと言えるもの …③・⑤・⑥・⑧・⑩
- (2) 当時の日本語の変化しつつある状況よりは伝統的な表現を集約することで学習者に配慮したと言えるもの …⑦
- (3) 当時の日本語の変化しつつある状況を反映しているものの学習者に対する配慮が少々不充分であると言えるもの …④
- (4) 当時の日本語の状況に未分化や混乱が残存しており、学習者に対する配慮に不充分な点や限界があると言えるもの …①・②・⑨・⑪

以上から、長谷川の教科書設計意図は、日本語の新しい変化の把握に基づく最新の、あるいは汎用性の高い日本語のみでなく伝統的な表現で集約・運用可能な日本語をも提供する、という形で実際の使用場面での学習者への配慮を優先したものであったとすることができる。このことは、『日語入門』に採用されなかった表現からも窺い知ることができる。

幕末期～明治後期に大きな変化があったにも拘わらず『日語入門』に(殆ど)採用されなかったものとして謙讓表現がある。具体的には、「オ／ゴースル」、「オ～イタス」、「ウカガウ」、「御覧ニ入レル」、「オ／ゴ～イタダク」、「～テイタダク」、「～テサシアゲル」等である。これらのうち『日語入門』に現れるのは、「コノ新聞ヲ御返シ申シマス」(72課)、「御供致シマセウ」(75課)、「^{ハジ}メテ御目ニ掛リマス」(89課)の3例のみである。

これについては、長谷川が当時の変化を十分に把握しきれていなかったとも言えるが、ここまで謙讓表現が抑えられていることから考えると、長谷川は、待遇表現については「～デゴザイマス」「～デアリマス」、「～デス」と「オ～ナサル」を徹底的に指導することで学習項目を絞り込んで学習者の負担を軽減し、併せて日本人との会話に於いて支障の(少)ない形を選択的に採用したと考える方が妥当であると思量する。

勿論、(4)に示したように当時の言語状況の混乱や、研究状況の限界もあったが、その制約の範囲内で、中国に於いて実地に学習者と接した長谷川は当時としては独力で考え得る最大限の努力を傾注したと言える。

他方で、長谷川の意図の一現代的視点から見ると一負の部分と、なお不明な点についても触れておきたい。

『日語入門』に決定的に欠落していることとして、「視点」という発想がないことを挙げておく。これは、具体的には：

- (5) 「行ク⇔来ル」の対応が考えられておらず、「来ル」がまず補助動詞として出現し、本動詞としても「行ク」とは関連づけられていないこと
- (6) 授受表現について、69課で「クレ」、「下サイ」、「上ゲマス」が出るが「クレマス」の形では出現せず、74課で「～テ貰フ」という補助動詞の形が現れ、最後に本動詞「貰フ」が80課で出てくるといった順序で系統性が認められないこと
- (7) 受身が86課で（のみ）出てくるが、7つの例文は直接受身と持ち主の受身のみで、説明は「鼠ガ猫ニトラレマシタ」という例文の上部欄外に「ラレ、ラル之変被也、以下レ字皆同」としか与えられていないこと

から明らかである。これはおそらく当時の日本語文法研究の限界と考えられるが、学習者の便宜を考えると、配慮が望まれるものである。

そのような問題点を内包する一方で、長谷川は何故か23課でテ形とアスペクト補助詞⁶⁾「～テキル」、「～テヤル」、「～テアル」、「～テイク」、「～テクル」（及び「～テミル」も）を集中的に取り上げ、他の課には全く見られない中国語の詳細な文法説明をそれぞれ「語尾変化大略」と「テアル、テキル用法大略」という項目を設けて執筆している（しかも86課で扱う受身まで一説明がないまま一先行して例文を出している）。この長谷川の、アスペクトに対する、明らかに他の文法事項とのバランスを欠くある種の“執拗さ”は何に由来するのか今後検討する必要があると思われる。

6. まとめ

小論は、日本語史的観点から『日語入門』の時代的特性と、長谷川の学習者に対する配慮の有無を考察することを目的とし、その結果として、長谷川が日本語の変化の把握に意を払いつつも実際の使用場面での汎用性を重視して配慮を優先したことを明らかにした。しかしながら、併せて、教科書としては「視点」という発想の欠如により配列や説明に問題のある点を含むことも指摘し、また、アスペクトに対する長谷川の特殊な関心をなお残る問題として提示した。

中村（2015：20）は；

- a. 長谷川本〔長谷川家所蔵初版本〕を含めた『日語入門』諸本の書誌学的・文献学的分析
- b. 吉岡（2002）の考察を引き継ぐ、現代日本語教科書の“源流”としての『日語入門』の特長の分析
- c. 『日語入門』草稿に見られる修正箇所洗い出しと修正点の考察を通じた長谷川雄太郎の教科書作成方針の解明
- d. 長谷川家所蔵の諸史料、特に『日語楷梯』との比較による『日語入門』成立過程の解明

の4点を今後の課題として挙げているが、これらのうちdは中村（2016）が一応の解答を示しており、小論は吉岡とは異なる方向からではあるがbについて一定の解答を示すことができたと思量する。今後は、残るa、cについて、明治期の他の日本語教科書との比較も通じて解明していきたい。

謝辞

小論執筆に当たり、多年にわたり多大の御指導を賜った長谷川家現当主で長谷川雄太郎御令孫の長谷川英之先生・文子様御夫妻には心から御礼を申し上げます。また、『日語入門』初版の実見に特段の御配慮を賜った東京都立中央図書館特別文庫室と資料の御提供に与った富山大学附属図書館、研究方法について御指導を賜った伊藤孝行先生（北海道大学准教授）、中村（2016）に貴重な御助言をお寄せ下さいました故・吉岡英幸先生（早稲田大学名誉教授）、関正昭先生（東海大学名誉教授）、長谷川恒雄先生（慶應義塾大学名誉教授）にも併せて深甚の謝意を表します。

註

- 1) 広州同文館の学習者は、劉（2005：75-76）によると；

「広州同文館の学生は最初から『満文（満族の言語文字）と漢文に通じる』者が求められ、しかも主として駐在防衛軍内に設置された、八旗子弟が満文と漢文の対訳を習う翻訳学館から生徒を募集することとなっていた。生徒は正式の学生としての『正学生』と聴講生の『附学生』に分けられ、正学生の定員は20名で、附学生は10名であった。…（中略）…第1期の正学生20人の内、16人は前述の八旗子弟の翻訳学館から選び、4名は当地の漢族の世家子弟から選んだ」

と説明されている。年齢については書かれていないが、劉（2005：72）によると、広州同文館に先行して設立された京師同文館の場合、「学生はすべて15歳前後の八旗子弟から選ぶことに決まっていた」とあるので、広州同文館についても同様であったと推定される。

- 2) 続は、『日語入門』について、鮮明（2011）『清末中国人使用的日语教材——项语言学史考察——』（中央编译出版社）を参照していることを註記している。
- 3) これについては、東京都立中央図書館特別文庫室実藤文庫所蔵本にのみ第9葉「方角」の末尾に、他の諸本にはない「南北」が存在している。筆者がこれを同館で実見したところ、「北」の5画目のはねがなく運筆の擦れが見られ、さらに裏写りの状態にムラがあり濃さも異なることからほぼ旧所有者の手書きによる書き込みであると判定した。
- 4) 底本では「第七十七」（＝77課）と誤植されている。
- 5) 底本では「墓参」の右に「ハカマキリ」、左に「ボサン」とルビが振ってある。ここでは右のルビのみ示した。
- 6) 小論ではアスペクトを町田（1989：10）に従い「発話者の事象の時間的性質に対する見方を伝える形式」と定義しておく。

参考文献

- 伊藤孝行（2017）『近代日本語史に見る教育・人・ことばの交流—日本語を母語としない学習者向け教科書を通して—』大空社出版
- 魏維（2016）「清末日本語教育における音声教育についての研究」『日本語教育』164号 日本語教育学会 pp.34-49
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- さねとうけいしゅう（1960）『中国人日本留学史』くろしお出版
- 続三義（2016）「中国の日本語教科書研究—清末の日本語教科書に於ける音声教育—」『経済論集』42巻1号 東洋大学経済研究会 pp.123-137
- 田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院
- 田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
- 田中章夫（2007）『揺れ動くニホン語—問題なことばの生態—』東京堂出版
- 谷口知子（2011）「伊澤修二の日本語教材『東語初階』・『東語真伝』」『関西大学東西学術研究所紀要』44 関西大学東西学術研究所 pp.341-355

- 鶴岡昭夫 (1979) 「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差―「行く」と「来る」について―」中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会編 (1979) 『中田祝夫博士功績記念国語学論集』 勉誠社 pp.621-641
- 中村重穂 (2015) 「長谷川雄太郎研究序説―『日語入門』諸本校異に基づいて―」『北海道大学留学生センター紀要』第19号 北海道大学国際本部留学生センター pp.1-23
- 中村重穂 (2016) 「長谷川雄太郎研究―『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて―」『北海道大学国際教育研究センター紀要』第20号 北海道大学国際連携機構国際教育研究センター pp.66-80
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』 アルク
- 吉岡英幸 (2000) 「明治期の日本語教材」木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会 (2000) 『日本語教育史論考―木村宗男先生米寿記念論集―』 凡人社 pp.13-25
- 吉岡英幸 (2002) 「明治期の語法型教材」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15 早稲田大学日本語研究教育センター pp.133-146
- 劉建雲 (2005) 『中国人の日本語学習史―清末の東文学堂―』 学術出版会

追記

小論執筆中の2017(平成29)年9月11日、謝辞にお名前を挙げた早稲田大学名誉教授・吉岡英幸先生が急逝された。全く突然のことであり、暗然たる思いにとらわれている。吉岡先生は言うまでもなく近代日本語教育史研究の第一人者であり、筆者も多々御指導を賜り、特に長谷川雄太郎研究を手がけるようになってからはお送りする拙論にいつも厳しくも温かい御批評を下さった。この小論も是非御高覧いただき御指導を仰ぎたかったがそれはかなわぬこととなった。小論をせめてもの「御供養」として捧げたい。謹んで吉岡先生の御冥福をお祈り申し上げる次第である。

なかむら しげほ (国際教育研究センター准教授)

A study of HASEGAWA Yûtarô (2): from the viewpoint of the history of Japanese

NAKAMURA, Shigeho

This paper aims to examine the content and text-design of “*NICHIGO-NYŪMON (Introduction to Japanese: NN)*” written by HASEGAWA Yûtarô, a teacher of Japanese during the Late Qing Dynasty, from the viewpoint of the history of the Japanese language. The paper analyses eleven Japanese expressions in the textbook which had changed drastically between the late Tokugawa Shogunate and the Meiji era, and finds that Hasegawa chose expressions which had broad utility in real situations, with due attention to language change in Japanese. At the same time, it is shown that Hasegawa had no concept of “viewpoint”, especially with respect to movement verbs, giving and receiving expressions, and the passive, and consequently was unable to provide appropriate explanation and arrangement for these items. Finally, the paper discusses the unclarified issue of why Hasegawa gave detailed explanations only on Japanese aspects, and points out the necessity of further research on NN.